

私たち(被災者)から
みなさんに伝えたいこと

- ◆ 被災直後の行動
- ◆ 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- ◆ もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したい
- ◆ 日頃から何を準備しておけばよかった

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

ここで紹介する物語は、ほんの一部です。一日前プロジェクトから生まれた約550の物語は、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」<http://www.bousai.go.jp/km/>に掲載されています。ぜひ、アクセスしてみてください！きっと、あなたの心を動かす物語が見つかるはずです。

おじいちゃんと一緒に笑顔の女兒

～ポスターで地域励ます～

学校再開の日、子どもが教室に来たときに誰もおらんじゃ寂しいもんだから、担任がおるようにしました。「校門とか通学路はほかの教員でやれるけど、教室には担任がおらないかん。子どもにとって我が家だよ」と言ってね。

1週間ぐらいは特に集団遊びを入れましたが、子どもたちは「校庭が割れる夢をみていけん。自分がその底に落ちていくような夢をみる」などと言っていました。きっと、近くの岩山が崩れたときの衝撃がすごかったんだと思います。

「不安だ、不安だ」って言いよる子どもたちには、カウンセラーの方や地域の人たちから声をかけてもらい、少しずつ元気を取り戻していきました。

そんな中、2年生の女の子がおじいさんと一緒に地域ボランティアで茶碗を洗っとる写真が報道され、それがポスターになって、街のいろいろなところに貼られるようになりました。女の子の笑顔がとても自然でね。子どもが安心してその地域の中で生活できていることが伝わってきて、すごく感動して、元気をもらったような気がしました。



鳥取県ポスターより

仮設のご近所がシルバー人材仲間に

地震後しばらくして、仮設住宅に入りました。自分が昔役場におった関係で、「自治会長みたいなことをしとうせ」ということで、連絡用のビラを配ったり、みんなの意見を聞いたりという役目をしていました。

良かったのは、町中のものだけじゃなくて、農業をやっている生産者も入り混じって、仮設に入ったことですね。町のものだけじゃできないことも農家の人と一緒にやればわけなくできる。そういう気持ちで仲良く過ごせました。おかげで、仮設で知り合った人たちとは、シルバー人材センターの仲間として、今でも一緒に働いています。

ただ、新築して家に帰ったけれど、タンスに転倒防止のベルトをつけているかっていうと、悲しいかな、つけてない人が多いのです。うちはちゃんと転倒防止をしているし、あれから10年になりますが、毎年ナップサックの中のものを取り替え、それを背負って訓練に参加しています。地震の恐ろしさを忘れてはいけないと思いますよ。



すごかった6年生 ～下級生守り、先生励ます～

校庭の向かい側にある岩山が、地震とともにガラガラと音を立てて崩れ、大きな石が校庭まで飛んできました。石が校庭に落ちると砂ぼこりがバーッと舞い上がり、まるで学校の方にどんどん向かってくるような感じになりました。

それを見ていた1年生、2年生が泣き出したので、養護の先生に対応をお願いしようと思っていたら、6年生の女子がその泣きじゃくっている子を、「大丈夫、大丈夫」って言いながら抱えてやっていたのです。

6年生といえばまだ子どもですわね。それが自発的に下級生をかばい、勇気づけている姿に感動しました。

全校生徒が126人ぐらいの小さな学校で、1学年1クラス。運動会とか掃除とかもみんな縦割りで活動してますし、毎日の登下校時には6年生が先頭と最後に立って、下級生と一緒に学校に通っています。そういうことが、いざという場面で生かされたんだなっていう気持ちですね。



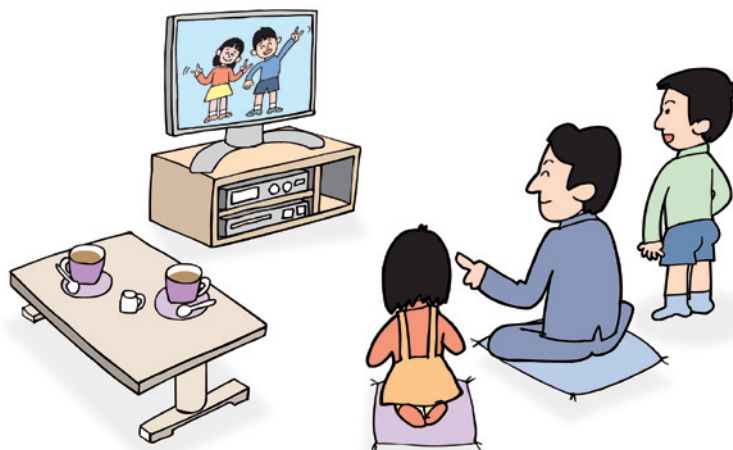
友だちにはビデオメッセージ ～休校中に児童を訪問～

地震が起きたのが金曜日で、次の日の土曜日には家庭訪問をしました。学用品を置いたまま家に帰っていますからそれを届けて、家庭がどんな様子なのかを聞き、通学路の点検をしました。

臨時休校の間は、毎日のように電話で「今、どんなことをしてる?」とか「どんな気持ち?」「お風呂に入ってる?」「心配なことはない?」というふうなことを聞きました。なんせ生徒が少ないですからね。家庭訪問も毎日のようにして、時には勉強してる子と一緒に課題を考えたりもしました。

それから、「友達へメッセージを持って行こう」ということで、子ども達の様子をビデオに収めて、みんなが元気にしているよということを知らせて回りました。

阪神・淡路大震災で心のケアが問題になりましたから、先生方もそのことを意識して行動していたと思います。



段ボールの切れ端片手に近所の安否確認

隣町で仕事をしていて、「何だかゴロゴロいうな」と思っていたら、地震でした。気持ちを落ち着かせようとタバコを数本吸って、急いでやりかけの仕事を終えて、車で町に向かったけれど、途中の石垣が崩れて通れず、車を置いたまま歩いて帰りました。

家に帰ってから、家内に頼まれて保育園にいる孫を引き取り、小学校に連れて行って、午後7時過ぎまで預かってもらって、小学生の孫と一緒に家に連れて帰りました。

午後の8時ごろ、地域の皆さんがどこに避難しているか各戸を回って安否確認をしようとしたら、書きとめる紙がなくてね。家の中はガタガタで入れないし、結局、近くの酒屋さんから段ボールをもらって来て、それを破って、家内と2人、上から下まで回りました。

その晩は一睡もせず、区域内を巡視して周りましたが、それは消防団のOBとして自発的にやったことです。災害が発生した時に行方不明の人が出ないようにすることが一番大事ですからね。



アクセル踏みつづけ、必死の運転

～車はマフラーに水が入ったらおしまい～

空港通りを行くと、博多駅前は大雨のために既に『通行止め』となっていました。「やばいな」とは思ったけれど、空港まで人を迎えに行くことになっていたんで、違うルートで行くことにしました。

車の心臓部は電気で動くコンピューターのようなものですから、水が入ったらおしまいなんですよ。万一、マフラー*から水が入ったら、車はすぐにストップしてしまいます。

だから、アクセル*ペダルを離さずに踏み続け、クラッチ*で調整をとるというやり方で、タイヤの半分ぐらいまで水に浸かった道路を運転してゆきました。ちょっとでもブレーキを踏んだら終わりですからね。もう、必死ですよ。

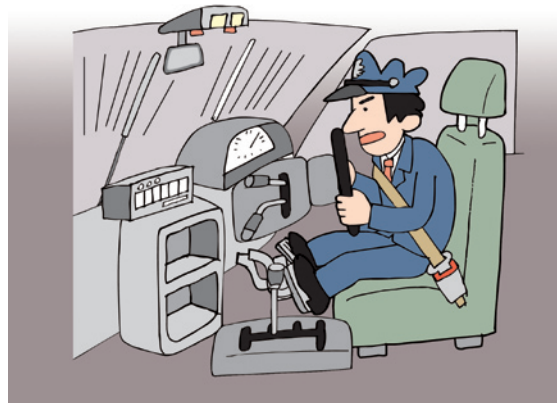
でも、これはマニュアル車(手動運転)だったからできたことで、オートマチック車(自動運転)が主流の今では、そういうやり方は通用しません。構造的にできませんからね。

だから、普段から水が溜まりやすい道路かどうかといったことを頭に入れておき、少しでも危険を感じたら、引き返す勇気も必要だと思います。

*アクセルとは、自動車の、足で踏んで速度を調節する装置(加速機)のこと。

*マフラーとは、オートバイ・自動車などの消音装置のこと。

*クラッチとは、エンジンの回転する力をタイヤへ伝えるのか、伝えないのかを選択する装置のこと。



大雨の中の運転はプロでも命がけ

～経験と判断で身を守る～

大雨が降っている時の運転は、プロの私たちでさえ命がけです。特に夜の運転は、ヘッドライトの光が雨に当たってはね返されてしまうので、先が全然見えなくなってしまう。そういう時は前に行く車のテールライトを頼るほかありません。

それに、ワイパーで処理しきれないほどの激しい雨になると、一瞬、前が見えなくなってしまう。そんな時、驚いて急にブレーキを踏んでしまいがちですが、あとからくる車が追突したりしてとても危険です。フロントガラスに水をはじく撥水^{はっすい}処理をしておくと、雨がストンと下に落ちて見えやすくなるので、できればそうしておくといいですね。

以前、高速バスが自分の車の横を通った途端にものすごい水しぶきがかかり、一瞬前が見えなくなって怖い思いをした経験もあります。

だから、「雨が降っている時はスピードを出さない」、「道路に水が溜まってきたら、自分の目でセンターラインの白い線が確認できなければ前には進まない」、ということを中心に運転するようにしています。



水害はドロの災害

～後始末に四苦八苦～

水害っていうのは水だけが来ると思っていたのだけれど、泥が来るんですよ。これは予想外でした。まさにヘドロですね。

水が引いたあとには、家の障子の棧にびっしり泥がついていて、拭いてもあとからあとから茶色い水が浮き出てくるんです。木の目の中まで泥水がしみ込んでいるから、乾くとまた泥が噴いてきて、拭くとぞうきんが茶色になりました。

水が引いて、皆さん家の前へ家財道具を出したでしょ。道路っていう道路の両側がゴミの山で、車が1台やっと通れるぐらいになっていました。当時、電化製品は水にぬれるとダメになると思い込んでいたので、水で洗えば使えるものまで捨てていました。生活の臭いがする道具がゴミとなり、山と積まれている光景を見るのはしのびなかったです。

乾いたら乾いたで、今度はほこりと粉塵。風が吹くと砂ぼこりがブワッと立って、マスクをしないと咳き込んだり、気持ちが悪くなったりするほどでした。水害って本当に後が大変なんです。



前の晩「おかしいね」と言いながらいつものように就寝

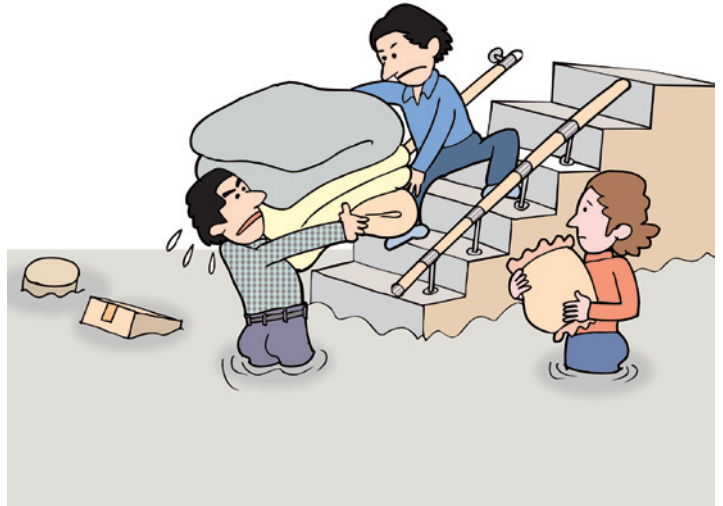
あの日の朝、新聞を取りに行った主人に、「玄関まで水が来ているぞ」と言われ、飛び起きました。私たち夫婦が1階で、80代のおばあさんと息子が2階で寝ていました。

水はみるみるうちに増えてきました。

バタバタしているのに気づいた息子が下りてきたので、「早く荷物を上に運んで!」と言って、布団とか、着替えとか、目の前のものをほとんど2階に上げました。仏壇は気がつくのが遅れて、水に浸っちゃいましたけれどね。

前の晩、雨の音にまじって何か聞こえた気がして戸を開けると、北の方に市の広報車みたいなのが見えました。うちの周りは排水が悪く、もうその時点で道路に水がたまっていたせいかこっちまでは来なくて、「あ、やっぱりなんか回っているよ」って感じでした。

ニュースでも言っていたし、雨がすごくて、「おかしいね、なんかすごいね」って話をしていたのに、堤防が切れるなんて想像もしていなかったの、いつものように寝てしまったんです。



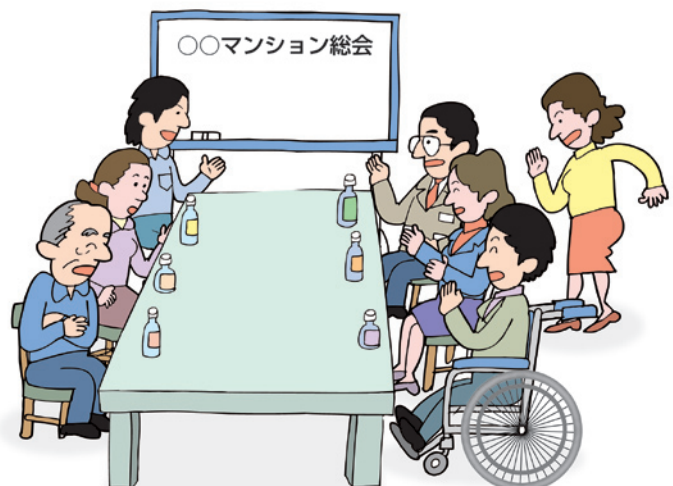
災害時の助け合いは普段のつき合いがあつてこそ

私の住んでいる分譲マンションでは、1階が床上40センチぐらいまで浸水しました。明け方に水が来た時は、1階の人と一緒に2階のベランダ越しに外を見ていたんです。

水が入ったために停電になり、エレベーターが止まってしまったので、9階に住んでいるひとり暮らしの障害者をおもちの方は、移動手段がなくなって、大変苦労されていました。で、そのお向かいやお隣の方が食料の調達とか、いろいろ面倒をみていました。

その障害のある方はマンションの年1回の総会にも必ず出てくるんですよ。だから、彼が車椅子で入ってこられるよう会議室の出口を広げたりしていて、ほとんどの住民が「がんばっている人だな」という認識がありました。

やっぱり、ふだんから近所つき合いができていたから、自然に手助けができたのだと思いますよ。連絡は取れない、総会にも来ないという人には手助けのしようがないですからね。



女性が一番困ったのはトイレ

隣近所5世帯ぐらいが近くのホームセンターの屋上に避難していました。避難所に行く時間の余裕がなかったのです。小さい子どもがおったり、妊婦さんがおったり、重度の障害児がおったり、それぞれに家庭の事情がありました。

屋上にある駐車場ですから屋根もなく、もちろんトイレ也没有せん。雨がジャアジャア降り、コンクリートに叩きつけられては水しぶきとなっていました。

食べる物がなかったのも辛かったけれど、何と言っても一番困ったのは、トイレでした。

男性はあっちこっち、雨の中で用を足していたけれど、女性はそんなわけにはいかんもので、うちの娘も「いい、いけない」って。体に良くないと言っても、夜中の2時から翌日の夕方4時ごろまでずっと我慢をしていました。

ようやく自衛隊のボートが回ってきて乗り込む順番を決める際に、みんなが「あんたのとこ一番でいい」って言うてくれて、嬉しかったです。



地域で緊急避難場所の提供を考えよう

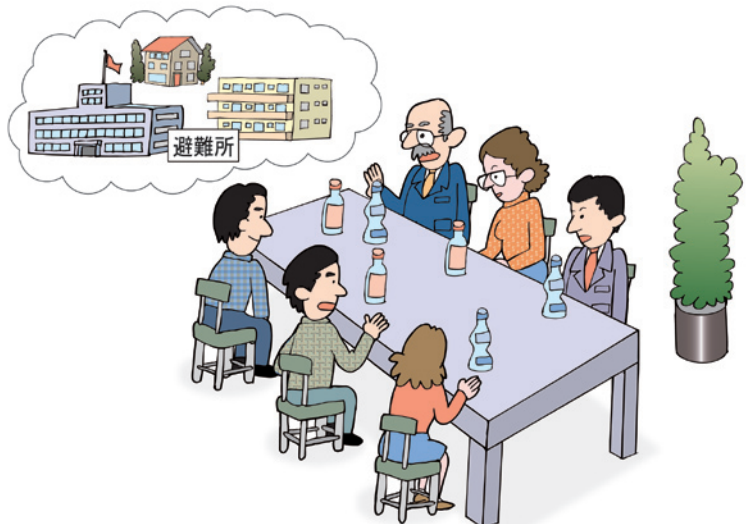
避難場所に学校とか公共施設だけを指定するのでは、とても収容能力が足りないと思いますね。

あの時、緊急的に近くの施設に避難した人たちがいましたが、水害の場合には、隣でもいいし、何階でもいいから、地域で共存して助け合って生きるという考え方から、民間にも避難場所の提供をあらかじめお願いしておくことも必要ではないかなと思っています。

断る人もあるだろうけど、3軒に1軒は協力してくださる方もいらっしゃるからね。そういうことを行政や自治会が積極的に声掛けしてやったらどうかと。

車椅子の人は、腰まで水が来たら、移動はできません。

近くの川の堤防が決壊して5メートルの濁流が来たら、遠くの避難所へは逃げようがないわけで、そういう時はやっぱり隣の2階、3階の家へ緊急避難っていうこともやらないといけないと思います。



土のう積みは消防団が災害出動。片づけは住民の手で ～役割分担を理解して～

水害の危険がある時に、私たちが土のうを築いていると、「うちの裏の方にも」って言われます。水害の場合は範囲が広すぎるから、なかなか手がまわりません。「待ってください。ここを積み終わらないと動けません」と言うと、「いや、何人かでもいいから」って。でも、やはり10人単位で行かないと、土のう積みなんかもさばけないんですよ。で、「何で早くやってくれなかった」って、後で文句を言われます。

逆に、水が引くと、「邪魔になるから、土のうを早く片づけてくれ」と言ってくる。きれいだったら自分のところに置いとって、汚れていたら中の砂は何かを利用して、袋だけゴミに出してくれればいいんです。

私たちも「土のう積みは災害出動ですが、片づけは自分たちでするんですよ」ということを、住民の皆さんへ意識づけをせないかんと考えていますが、自主防災の役員の人たちもこういうことを理解して、次の人にちゃんと引き継いでくれたらいいなと思いますね。



消火栓でヘドロを洗い流す ～二次災害防止で分団と地域が決断～

水害の後は、道路が乾く前にヘドロを完全に洗い流さないと、あとで車が通るたびに粒の細かい粉末のような砂ぼこりが舞ってスモッグ状態になり、歩くことさえできなくなります。

ヘドロを普通の水道で洗おうとしても勢いが足りません。消防のホースを消火栓につないで一斉にダーっと洗ってしまえば早いんです。でも、水道水を使うことになるから経費が高くなるし、消火栓を火災の消火活動以外に使っちゃいけないという法律もあるから、最終的には市長の判断が必要になります。

ただ、大規模災害のときは、消防団の分団長または副分団長の判断で活動できる部分もありますから、私たちは地域の自治会長さんと相談して、「お金ですむことならば」ということでやりました。

そうしなかった地域から、「何とかしてくれ」という苦情が市の方にたくさん寄せられたそうですが、これからはこういう事もあらかじめ検討しておく必要があると思いますよ。水害の場合は、とにかく汚れが乾く前に洗い流すこと。後片付けも、初動活動が大事なんです。



地下浸水防止は地域ぐるみで

～駅周辺のビルと連携、訓練も～

博多駅は、地下道でつながっている『接続ビル』が多い駅なんです。地下鉄の入口は止水板*とかで水の浸入を防ぐことはできるけど、隣接したビルの一カ所でも水が入ったら、地下鉄はどうしようもありません。当時も隣のビルの駐車場に入った水がドッと押しよせてきました。

で、「地下鉄が一番低いんだから、そっちへ水やっつけ」っていう考え方じゃなくて、「何かあった時にはお互いに連絡をとりながら対応しましょう」ということで、周りのビルとのネットワークを作りました。地下街はもともと防火に対する意識が高く、防火管理協議会という組織ができあがっていましたから、それに水害対応を加えたかっこうです。

「洪水になりそうだよ。うちは止水板をするから」という情報を流したら、皆さんが「そういうことなら、うちも止水板をたてよう」っていうような、情報交換のシステム作りを進めていますし、緊急事態になると人はどうしても慌ててしまいますから、こういう場合はどこに何を連絡するかといった訓練も合同でやっています。

1ヶ月に1回の訓練でも、やれば少しずつ身に付いていくものだと思います。どこの都市でも地下空間がどんどん広がっていますから、連携して水の浸入を防ぐことがますます大事になると思いますね。

*止水板とは、建物や構内の出入口に設置して、水の浸入を防ぐ板のこと。



地下鉄入口の止水板設置のタイミング

～お客さまに不便をかけたくないと悩む～

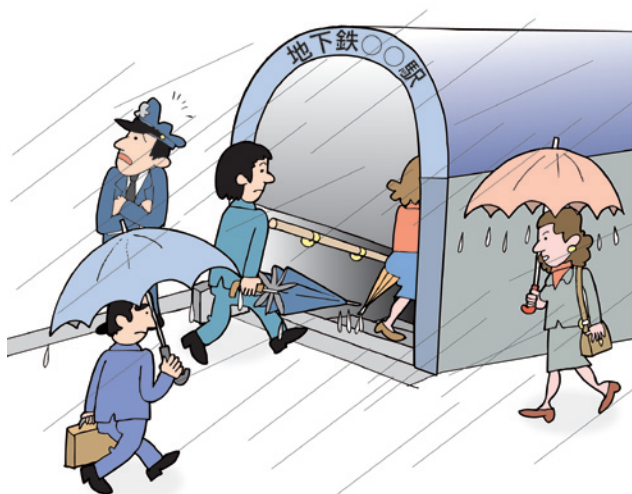
水が来てからじゃ遅いので、水が来る前に止水板*を取り付けるとなると、今度はお客さまに不便をかけることになります。

低い止水板だったら「通ってください」って案内はできるんだけど、45センチ以上の高さの板をまたいでもらうとなると、そこに椅子とか踏み台みたいなものを置くことも考えなくちゃいけないし、そばに人を配置しておかなければなりません。

早めに設置する方が良いことは分かっているけど、電車が動いているのにお客さまがホームに入れない状況にはしたくないという気持ちがあります。

電車の運行に関しては、線路がどこまで水に浸かったら止めるっていうような基準はありますが、止水板の設置は現場に任されていることが多いのです。営業時間中に止水板の設置をするかどうかの判断は、本当に難しいと思いますね。

*止水板とは、建物や構内の出入口に設置して、水の浸入を防ぐ板のこと。



高校生を話し相手に笑顔のおばあちゃん

～集落総出でボランティア～

被災した集落では、そこに住む人たちが総動員で水害のあと片づけをやりました。家がどっぷり水に浸かっているのに、毎日毎日救援物資を配る手伝いをしてくれたおばあちゃんもいました。配って歩いているから、自分の家に救援物資が来たときに受け取る人がいなかったというおまけ付きでね。

中学生、高校生も手伝ってくれました。「もう、あんたら一緒にお茶飲もうや!」と言って、高校生とお茶を飲んでいるおばあちゃんが一番嬉しそうでした。私たちが泥かきするよりもずっと。

やっぱり、しゃべりたかったんです。命はかうじて助かったものの、家中泥だらけになって何から手をつけたら良いかもわからず不安がいっぱい。そんな時、孫みたいな高校生と話をするだけで、すごくホッとしたんだと思います。



入れ歯流され、体調こわすお年寄り

～同じ目線で気持ち汲みとる～

私は看護婦ということは前面に出さずに、「同じ地域の住人ですよ」という姿勢で活動していました。「薬が流れた」という話が出れば、「何の病気なの?」と聞く。たまたま免許を持っていたという感じで。

食べる所は1階、寝る所は2階でしょ。洗浄液に浸けた入れ歯は下の洗面に置いてあるから、水で流されてしまって、食べようと思っても歯がないっていう人たちもいました。

2～3日で歯が入れば問題ないかっていうとそうじゃなくて、その2～3日のあいだに食べる物がいつもと違うとなると、私らが体調を取り戻すよりも高齢の方はかなり時間が掛かるし、実際にそれがきっかけになって後々体調を崩すおじいちゃん、おばあちゃんがたくさんいました。

「食べれんかもしれん。よう食欲は無いけえ」、「でも、食べにゃいけんよ」という会話の後で、よく事情を聞けば入れ歯が流れたということですね。同じ目線に立たないと被災者の方からなかなか近づいてくれません。気持ちを汲んでやるのが精一杯でした。



「避難勧告」発令で、企業の社宅に避難

～地域応援協定がさっそく生きた～

当時私は現役で、地域と応援協定*を結ぶ会社側の代表として、自治会長さんと話しをする立場でした。「40年間住んでいて一度もなかったから」と言うか、4つもダムが整備されているわけですから、水害なんて想像したこともありませんでした。

でも、その数年前にインド洋などで大津波が発生し、大きな被害が出たのをニュースで見て、自分たちの地域に津波が来たらお手上げだなと思いました。海と川に近いただけでなく、回りは平地ばかりですからね。津波に襲われたら逃げ場がないぞということで、コンクリート造の4階建ての社宅の2階以上を避難場所としてはどうかと考えたわけです。

当時の市長からも、企業のマネジメントのノウハウとか、資産とかを地域にどんどん提供してくださいと言われていたこともありましてね。防災管理課の課長さんと相談しながら半年で協定の締結にこぎつけました。

それが企業と市と地域で交わした協定の第一号となりました。もし、協定がなかったら、避難勧告*発令と言っても、どこに避難するか、みんな迷っただろうと思いますね。雨の中を1キロ先の中学校に行きなさいと言っても、数人避難するかどうかでしょうね。協定を知っていたから、百数十人というたくさんの方が迷わず社宅に避難できたのではないかなと思います。その年の1月に調印して、9月に台風。タイムリーでした。

*応援協定とは、行政機関と民間事業者又は他の行政機関等との間であらかじめ協定書を交わし、災害時における人的・物的支援についての協力を確保するためのもの。

*避難勧告とは、その地域の居住者等を拘束するものではないが、居住者等がその「勧告」を尊重することを期待して、避難のための立退きを進め又は促す行為のこと。



「とりあえずの避難」でも、必需品は持参して

～夏でも必要だった毛布～

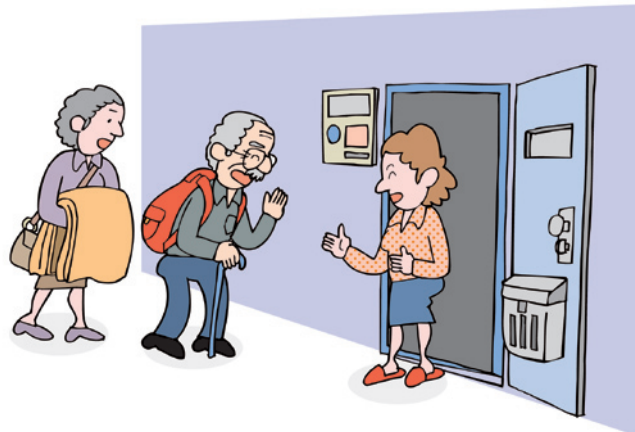
避難勧告が出て、私たちは応援協定を結んでいる社宅に避難させてもらったわけですが、社宅には人が住んでいらっしやるので、2階と3階の廊下や階段で避難勧告の解除を待っていました。

中には、生まれたばかりの赤ちゃんもいて、民生委員の私としては、ちょっと心配だったのですが、社宅の組長さんの好意で家の中に入れてもらえました。

それから、血圧の高いお年寄りがいらして。夏とはいえ、だんだん冷えてくるんですよ。毛布とかもないし、イス也没有から。かろうじてタオルケットは持っていたので、「これをかけておいてください」とお渡ししましたが、気が気ではありませんでした。

そのうち、社宅に住んでいる方が「赤ちゃんとかはどうぞ」なんて、声をかけてくださったので、そのお年寄りも部屋の中に入れていただきました。廊下にはお手洗いがないので、トイレもちょっとお借りしたりね。親切にしてくださいて、本当に助かりました。

それにしても、夏でも毛布が必要だなんて、実際に避難してみないと分からないものだと思います。



「避難勧告」ってどこから来たの？

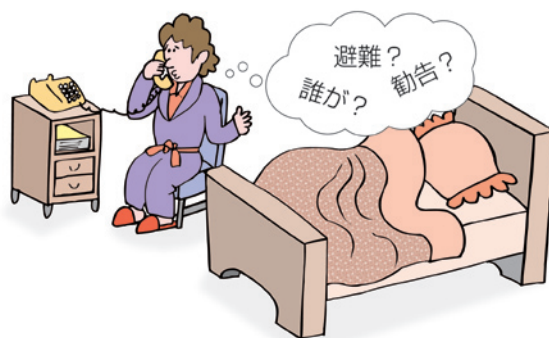
～情報の出所わからず、どうしてよいか迷う～

電話がかかってきたのが午前3時半ぐらい。夜中ですからいたずら電話かなと1回は無視しました。でも、台風が心配で遅くまでテレビを見ていたこともあり、2回続けてかかってきたので、「もしや」と思って電話をとりました。

電話はご近所からでした。班単位でかけてきたようで、「台風が来ているから、避難するように言ってきましたよ」とのことでした。「避難勧告って、どこから連絡が来たのですか？」と訊いたら、「わかりません」と。だれが言い始めたのか、正式な情報なのかどうかもよく分かりませんでした。

最初に、隣の茅ヶ崎市の広報車がやってきたんですよ。隣の市との境界が入りこんでいるからすぐ近くに聞こえるんです。だから、ご近所の中にはそれを聞いて慌てて隣の市の避難場所に行った人がいたそうです。次に、平塚市の広報車も来たので、「ほんとうだ、じゃあ行かなきゃ」と、いつも用意してあるリュックを背負って、広報車が言っていた避難場所に行きました。

まだ数名しか避難してきていなかったもので、民生委員をしている私はすぐに引き返して、ひとり暮らしの方の戸をトントンと叩いては、「とにかく起きていてくださいね」、「もしかして行かなきゃいけなかったら、必ず連れに来ますから、1人で出てこないでくださいね」と言ってまわりました。



「避難勧告」を知らせても、誰も避難しなかったアパートの住民

避難勧告*、避難指示*、僕はそういう区別もわからなかったし、避難勧告が出るなんて思いもしなかった。避難に関する協定を地元の企業と結ばせてもらったということは知っていても、台風が来たから避難しなきゃいけないなんて全然考えてなかったの、電話が来たときには驚きました。

うちはアパートを経営しているので、真っ先に、「アパートの人に知らせなきゃ」と思いました。自分の判断ですけど、水がくるとすればこの方向。だから、1階の人だけには知らせておこうと、ウインドブレーカーを着、傘をさして家を出ました。

玄関ドアを「コンコン」とたたいて、1軒1軒知らせて回ったけれど、アパートの1階の8軒あるうちの3軒ぐらいは、居留守を使ったか、そもそも出てこない。その他は一応出てきたんだけど、時間が夜中の3時半でしょう。結果的に、1人も避難には参加しなかったですね。みなさん若くて、お一人の方ばかりですから、自治会の活動とか、ゴミの件とか、集合住宅でよく問題になるけれど、その端的な例かなという感じはしました。

その後、相模川の水位がインターネットで分かるようになったので、雨が降るとすぐに、今は1メートルだとか、2メートルぐらいだとか、注意して見るようになりました。

*避難勧告とは、その地域の居住者等を拘束するものではないが、居住者等がその「勧告」を尊重することを期待して、避難のための立退きを進め又は促す行為のこと。

*避難指示とは、被害の危険が目前に切迫している場合等に発せられ、「勧告」よりも拘束力が強く、居住者等を避難のため立ち退かせるための行為のこと。



避難の経験が地域の人を結びつけた

～若いお父さん、お母さんも地域の活動に参加～

あの時、「避難勧告」*が出て、応援協定*どおりに近くの工場の社宅に避難し、「解除」になるまで地域の人たちが一緒に過ごすことになったのですが、そのことが防災を意識するきっかけになったかもしれないなと思っています。

実際、若いお父さん、お母さんが防災訓練などへ参加するケースも多く、子どもさんも連れて来て、子どもの前でいい格好をしたいということもあるのか、意外と積極的に動いてくれるんですよ。自治会としても子供さんにはお菓子もちょっと用意しています。

僕は自治会長の立場ですが、公園の掃除は単に公園をきれいにするためじゃなく、助け合うことを目的にしているものだと考えています。きれいにするだけなら専門の人がすればいいことですよね。清掃は月2回で年間10回、あと大そうじもやっていますが、延べにすると二百何人が参加しています。

その公園は、10年ぐらい前に市に頼んで作ってもらったもので、記念に植えた桜の木の下で毎年お花見をしています。そうやって、コミュニケーションを深めていけば地域の力が上がって、当然防災にも役に立つ。防災の行事だけを一生懸命やろうとしたって無理で、日ごろからどうやってつき合っていくかだと思いますね。

*避難勧告とは、その地域の居住者等を拘束するものではないが、居住者等がその「勧告」を尊重することを期待して、避難のための立退きを進め又は促す行為のこと。

*応援協定とは、行政機関と民間事業者又は他の行政機関等との間であらかじめ協定書を交わし、災害時における人的・物的支援についての協力を確保するためのもの。



経験踏まえ、復旧業者を早めに手配

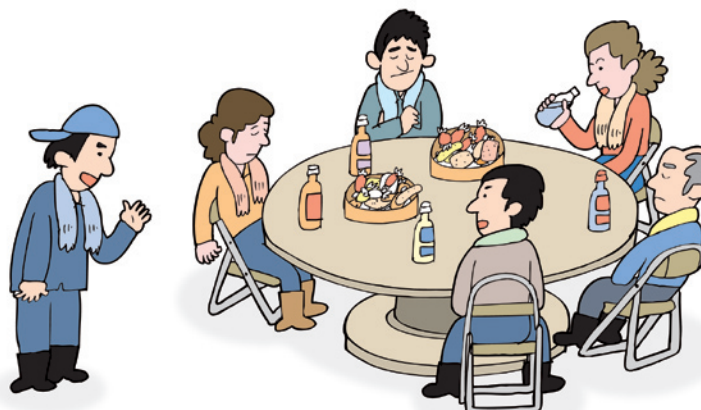
～従業員のケアも忘れずに～

昨年は水が入ってから復旧業者等の手配をしましたので、どこも引っ張りだこで、連絡が1分でも遅れると順番がだいぶ後になるということで、施設の復旧も遅れました。

その経験がありましたので、今年は水が引かないうちに皆スタンバイの状態。水が来る前から「これは来そうだ」ということで連絡を入れ、待機してもらっていましたから、すぐに復旧作業にとりかかってもらえました。

それから、従業員の皆さんには、2時間おきぐらいにロビーに集まって手を休めてもらい、復旧作業が続いて疲労がたまっていないか、ご自宅の被災状況はどうかといったことを確認し、「残れる方だけ残ってください」というかたちにしました。

このやり方は従業員に無理をさせないという点で、とても優れたやり方だと思いますね。早く業者さんの手が入ったこともあって、手際良く片付けが進み、休業は当日と翌日の復旧作業の2日間だけで、その次の日から営業を再開することができました。



紙おむつがプカプカリ

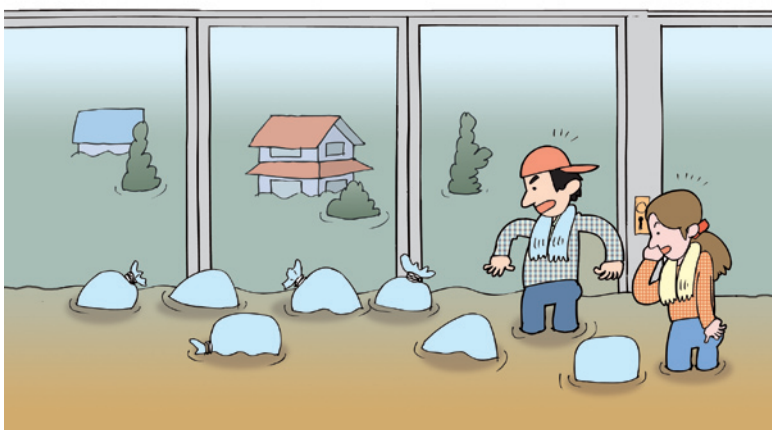
～水の浸入防ぎきれず～

今年は川があふれたので、昨年とは比べものにならないほどの水が来ました。玄関の外からブルーシートと土のうで水の浸入を防ぐわけですが、想定していた土のうの高さよりさらに上に水が来たせいか、残念ながら完璧にくい止めることはできませんでした。

男性のモモのあたりまで水が来ましてね。玄関のガラスの向こうは、もう水族館状態なんです。外から水圧がかかりますから、シートがドアのすき間に密着するようになってある程度はカバーできるはずなのですが、水が入り始めました。

「じゃあ、どうしようか」ということで、ありったけの紙おむつを出してきて、玄関とエレベーターの周りに置きました。

「とにかく満潮までがんばったら何とかなる」という頭でおったのですが、どういうわけか満潮になっても水が引かないんですよ。そのうちに、「あっちに水が入った。こっちに入った」というかたちになって、紙おむつがいっぱいプカプカ浮き出したのです。水を吸えば土のうの代わりになると思ったのですが、悲しいかな、そうはいきませんでした。



ボランティアの健康管理にひと役

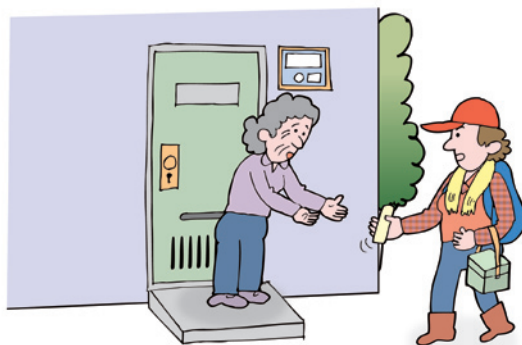
～災害支援ナースは、被災者にも勇気を～

私は、昨年『災害支援ナース』*に登録して、防府市の災害支援を経験しました。今年は山陽小野田市で、主にボランティアさんに目を向けた活動をしてきました。「定期的に水分を摂られていますか?」、「お弁当は風通しが良い、涼しい場所に置いていますか?」と声をかけて回ります。ケガをされた方がいると聞けば、すぐに手当に向かいます。

ボランティアの方って、ついつい一生懸命になって、自分の健康管理をおろそかにしがちですから、そこが私たちの出番なんです。

ボランティアさんのいるところには当然ながら被災者の方もいらっしゃるの、線引きはせずに、被災者の方へも声をかけます。今回は記録的な猛暑でしたので、ギンギンに冷やしたおしぼりや飲み物をクーラーボックスに入れて、配って歩きました。

家の中は泥だらけで、とても住めるような状況じゃありません。中には、私たちの顔を見て涙を流される老夫婦もおられました。子どもさんは県外に出ていて、今は2人暮らし。きっと心細かったのだらうと思います。



*災害支援ナースとは、看護協会の研修を受け、災害が起こった際に支援活動をする旨に登録しているナース(看護師)のこと。

一日前プロジェクト みんなでやってみよう！

－簡単な手順を紹介します－

まず、過去の自然災害（地震、水害等）の中から対象を選ぶ



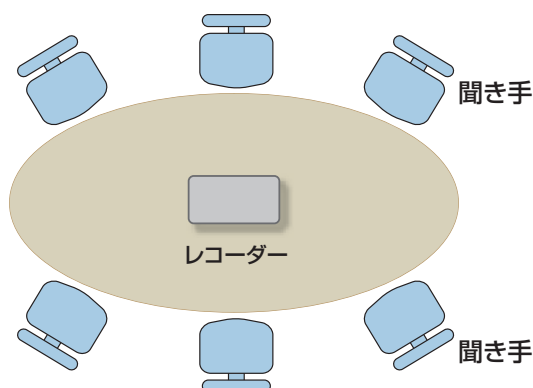
その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける



みんなが集う場所と時間を設定する ※所用時間は約2時間



なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、
体験したり感じたことを話し合ってもらおう ※話し手は、2人～4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける



テープ起しなどを基に、拾い出した部分を「物語」にする

※物語は、300字～500字程度で、できるだけ語り口を残して編集

※物語の情景を表すイラストや写真等を添えると効果的



作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう



第26回 防災ポスターコンクール入賞作品

防災担当大臣賞



幼児・小学1～4年生の部

鹿児島県
出水市立江内小学校 1年
樋口 雄大(ひぐちゆうだい)さん



小学5・6年生の部

兵庫県
川西市立加茂小学校 6年
村上 巧実(むらかみたくみ)さん



中学生・高校生の部

長崎県
佐世保北高等学校 2年
竹内 翔祐(たけうちしょうすけ)さん



一般の部

長野県 長野市
齋藤 貴博(さいとうたかひろ)さん

防災推進協議会会長賞



幼児・小学1～4年生の部

岡山県
たちばな上中野保育園 年中
樋口 実優(ひぐちみゆ)さん



小学5・6年生の部

静岡県
森町立宮園小学校 6年
高木 真希(たかぎまき)さん



中学生・高校生の部

京都府
洛南高等学校附属中学校 2年
古賀 千紘(こがちひろ)さん



一般の部

長野県 長野市
中山 彩(なかやまあや)さん



内閣府(防災担当)

〒100-8969

東京都千代田区霞ヶ関 1-2-2 (中央合同庁舎第5号館3階)

TEL : 03-3503-9394

URL : <http://www.bousai.go.jp/km/>

平成22年度防災ポスターコンクール入賞作品より
その他の作品は次のホームページからご覧いただけます。
<http://www.bousai.go.jp/>